

神頼みと因果応報

「青年は未来があるというだけで幸福である」

ゴーゴリ（ロシア）

「恋が生まれるにはほんの少し希望があれば十分です」

スタンダール（フランス）

高校の屋上、フェンスに背中を預けて夕焼け空を見上げていると昔聞いた言葉がふと浮かんできた。

梅雨の中晴れの日の夕暮れ時。既に太陽は半分ほど沈み、空は赤から紫色に変わり始めている。

昨日までの雨のおかげで6月の終わり間近にしては涼しく、制服に指定されている校章入りYシャツの袖をまくる必要もない。

グラウンドや体育館からは夏の試合に向けて練習を重ねる運動部の声が響いてきている。

右手にはブラックの缶コーヒー、あんまりおいしいと思えない。

俺は今日も一人で黄昏ていた。

そう、『今日も』、『一人で』

ちなみに俺が屋上に来た時一組のカップルがいた。

おかげで俺はそいつらが出て行くまで30分ほど屋上への階段下で待機する羽目になった。……なんか死にたくなった。

「はあ」

夕暮れの学校の屋上、一人、片手に缶コーヒー、ため息、高校2年生、これが俺の高校での青春のほぼすべてだった。

名前は野田一輝、別に変な名前ではない。

成績はクラスで10番学年で全体が400人中80番、まあちょっといいくらいの成績だ。

部活、クラブは入っていない。

クラスでは、まあ普通のヤツって扱いだ。

容姿、性格、その他含め普通、そう全部普通だ。

ただちょっとした問題があるがそれは今は置いておこう。

「こんな普通で無害な俺にどうして彼女ができないんだ」

「簡単なことだ君は普通じゃないからさ」

背にしているはずのフェンスの方から声がした。

聞き慣れた幼馴染の声だった。

「俺が普通じゃないただ一つの理由はお前がいつもいつもそばにいることだ」

「人のせいにするなど何回言ったら分かってくれるのかな」

そいつはそう言いながらフェンスを乗り越えてきた。

フェンスの上から飛び降りた際にそいつがよく自慢している長いストレートの髪の毛がフワリときれいに舞い上がり、辺りにシャンプーのいい香りが立ち込めた。

優雅に俺の真横に着地し、なにか含みを感じる笑顔で俺のことをジッと見た。

関口静、こいつの名前だ。

ネコのように丸くなったり、一転して鋭くなったりする野性味を感じさせる目、整った美人といえるレベルの顔立ち、ぷっくりと膨らんだ口紅を塗ったかのような真っ赤な唇、すらりとした体、白い肌。

文句なき美人、こんな幼馴染がいるだけで俺は既に初期レベルが人の5倍くらいあるほどのチートだろう。

本来ならば……

もったいぶらずにネタバレしよう。こいつ男。

俺の人生純愛とかハーレムとか男の娘とかおもしろすぎるものはないから。

声は男にしては高めのアルトボイス。

校則を全力で踏みにじて女生徒用制服を着用。

嫁に行くまでに大勢の人に素肌をさらすなど日本男児の風上にもおけぬっと言って水泳の授業は全てさぼる。

中学から一貫して模試の全国ランキングに載る成績。

レベルが高すぎる対人関係。

以下その例

男子は『関口静親衛隊』（静に近寄る口実のため俺に友好的）、女子は『関口静ファンクラブ』（一日最低10回は静からイジラれる俺をなぜか羨ましがり俺を攻撃してくる）、生徒会は『関口静観察保護の会』（俺のことは無視）、先生方は『関口静対策委員会』（俺に関口を管理しろと言ってくる、知るか）

それとは別にもはや規模すら分からない『関口静を野田一輝から守ろうの会』（俺に対して露骨なことはしないが居心地が悪い、てゆーか意味不明）

女装趣味、ねじまがった性格、高いIQ、そして理不尽すぎる人間関係。

間違いなく俺の高校生活から恋の生まれる可能性、明るい未来を奪っているのはこの男である。

「ボクは君のお母さん公認の君の教育係なんだから、君が人間として間違いそうな兆候は見逃せません」

如何にも怒ってますと言いたげに腰に手を当てている。

「高校の屋上で独り言なんて暗いよ。もっと学生らしく希望のある話をしようよ。例えば将来、そう人生設計の話、結婚とか結婚とか結婚とか」

結婚の部分は一回ごとにクレシェンドしていた。

「暗くもなるさ。よく考えてみろよ。今の俺には女の子と仲良くなるきっかけはおろか男子と仲良くなる希望もないんだ」

そう、この関口静と幼馴染というだけで男子からは嫉妬交じりの視線、女の子からは笑顔と敵意の嵐を向けられるのだ。

しかもこいつ自身がこの風潮を煽っている。

むやみに肌を密着させたり、うるうるとした目で俺を非難したり、誤解しか招かないことを言ったりとやりたい放題だった。

1年に渡るこの活動の成果が今の俺の状況である。

彼女なし、友達ほぼなし（体育でペアになれるヤツくらいはいるぞ、一緒に帰るやつはいないが）、宿敵（関口静）と壊滅した学生生活を営んでいる。

……学校始まって帰宅まで話すのは静と日直と先生しかいない。

登校から下校までなにかと静が絡んでくるのだ。

平穏な学生生活なんてはるか遠くのユートピアだ。

「彼女が欲しい、それが無理ならせめて普通の友達が欲しい」

普通のところはアクセントをつけて言った。

「もしかして僕一人でそれを賄おうとしているの」

静は大げさに顔を伏せてもじもじとしている。

「あの、僕たちは男同士だよ。確かに小さいころから一緒にいるけど、そのその僕は普通の清い関係でいたいんだ。かずくんが僕のことそんな目で見ていたなんて……ちょっとショックだけど」

「心にも思っていないことをつらつらと述べるな。なんだ『かずくん』って。いつも静は俺のこと『きみ』とか『そのの』とかいう雑な呼び方しかないだろう」

「そんな心にも思っていないなんて。ひどいよかずくん僕はね隠していたけどね……よし明日からはこのキャラクターでいこう」

途中までのうるうる目から一転、ケラケラと笑い出した。その目はネコのように細く鋭かった。

「全力で阻止する」

「やってみなよ。僕もたまには黒星でなく白星を君にあげたいしさ。特に最近は張り合いがないしね」

最近の俺はこいつに流されるままいじられている。

「あと僕も阻止したいことがある。屋上で空しく昔の言葉を呟いている君をなんとかしたいな」

「余計な一言だ」

「余計？ いま一番必要な気もするけど」

「……彼女が欲しい」

「無視しないでよ」

「彼女ができればもう何もかも解決する気がするな」

「それ気のせいだよ」

「……帰るか」

「はい、カバン持ってきたよ」

「ああ、ありがとう」

静からカバンを受け取ると急ぎ足で校舎から出て行った。

\*

校門から出るころにはすっかり暗くなっていた。

いつものように静が横にいて他愛のない話（60%の確率で俺が煮え湯を飲む）をしている。

俺たち二人の家は同じ住宅地にある。

似たような建売の2階建ての家、違いと言えば壁と屋根の色くらいしかない。

「ねえねえ、4月くらいから彼女が欲しいって言い出したけど、そんなに欲しいの？」

「ああ、そうだ」

「即答だね」

「ああ、このままだと俺の青春は灰色のまま終わってしまう。今更部活は無理だし、当然勉強もお前に勝てるわけない。一発逆転は彼女を作ってバラ色生活を送るしかないんだ」

「……ひどい動機、幼馴染の愛のムチ、教育的指導」

スッと体を沈め、俺の脇腹に肘を入れてきた。

静は頭一つ分俺より身長が低い分きれいに肘打ちをきめられるのだ。

「うぐっ」

「恋人作るならちゃんとしないと」

「うるせーよ、お前みたいに男女問わず友達に囲まれているヤツに俺の気持ちは分からねーよ」

「自分から友達がいないなんて言わないでよ。悲しくなるじゃない」

「そうだよ、お前のせいで悲しい学生生活を過ごしているんだよ」

「むう、また人のせいにして。教育的指導だよ」

とっさに脇腹を守りガードを固めた。静は腹パンをさく裂させた。

「お前、男、なんだから、手加減を、しろよ。なかなか効くんだよ」

ちなみに反撃したら更なるお仕置きが待っている。

俺は静に殴り合いでも勝てないのだ。

こいつに俺が勝てる唯一のものは料理だけである。

「だったそんな不真面目なこと言わないこと。君の両親に申し訳が立たないんだよ」

家の両親とこいつは抜群に仲がいい。謎すぎる。

こんなことをしているうちに静の家に着いた。

ここからもう少し歩いて住宅地はずれ辺り、林の側がに俺の家がある。

「じゃあ、もうお別れだね。楽しい時間は過ぎるのが早いよ」

「俺は遅く感じるな。辛い時間はとっても長いな」

「そうだ君に一つ助言をあげよう」

俺の皮肉は水に流された。

「恋愛と戦争では手段をえらばない。イギリスの諺さ」

そういうと静は家の中に入って行った。

「そうだな。手段を選んでいる場合じゃないな」

男友達ほぼ0人、女友達0人、彼女なし、受験で忙しい高校3年生まであと半年とちょっとで時間もあまりない。そして、季節は初夏。夏本番は目の前だ。

「よし、思い立ったが吉日だ」

俺はさっそく行動に移すことにした。

\*

「神様、お願いします」

30分後、俺は人気のない神社の境内の真ん中に五体投地で祈願していた。  
家の側の林の中を少し歩くとこの人っ子一人いないこの神社がある。  
今年の5月に発見したものだ。  
俺が静に見つかっていない最後の一人になれる秘密基地でもある。

「神様、彼女を。俺に彼女を下さい。パンを啜えた女の子にぶつかる、今日帰ったら親が許嫁を連れてきている、空から降ってくる、今魔方陣が現れて魔女っ娘が出てくるなんでもかまいません。フラグを立ててください」

こうしてさっきから祈祷している。供物としてフ●ミチキと諭吉さんを賽銭箱に捧げてきた。

「女の子を、彼女を、俺に青春を下さい」

その後、親からの搜索依頼のメールを受け取った静に見つかるまで俺は祈祷を続けた。  
こうして俺は最後の秘密基地を失った。

「ひどいものを見た」

静に脅迫される内容がまた増えた。

\*

家に帰り冷たくなった晩飯と風呂を済ませた後、俺はなんとなく憂うつだった。  
明日は今日の祈祷のことを静から言われることが確定しているからだ。  
俺は少し重たい足を引きずりながら2階の俺の部屋に入った。

「初めまして、こんばんは」

俺の部屋のベッドの上に見たことのない女の子が座っていた。  
白い髪、今時珍しい赤の女物の着物を黒い帯でしめている。華奢な体は抱きしめるのがた  
められるほどだった。  
そして、俺は悟った。

「きた、これで勝てる」

神頼みが通じたということ。  
また自分が予想よりロリコンの資質があることの二つを……

「大丈夫、落ち着いて」

俺は彼女を抱え上げ、お姫様抱っこをした。  
そのままぐるぐると部屋の中を回りだした。

「なにこれ〜」

「ハッハッハッ」

できるだけ落ち着いた大人の男を意識した笑い声をあげた。(つもり)

「うえ、やめんか」

抱えている女の子から頭突きを顎に決められた。

「ほげ」

そのまま仰向けに床に倒れた俺の腕から抜け出すと女の子は俺のおでこを思い切り踏みつ  
けてきた。



「そのまま聞け、この無礼者。ワシは貴様の願いを聞きやって来たものだ」

俺を踏みつけている女の子は高飛車な態度でそう言った。

「ワシは恋愛を成就させる義務を負った者である。先刻の願い確かに聞き届けた。ワシが必要な縁を貴様の運命に張り巡らした」

一層強く踏みつけてきた。やめてなんか癖になりそう。

「わかったか」

たぶんだけど、わからないと言うといけないと思う。

「もっとわかりやすく」

少し踏む力が強くなった。……うん、いい感じ。

「貴様に女の子と出会うフラグを立てた。回収は自分でしろ」

一気にわかりやすくなった。

「出会いフラグ？」

「ああ、貴様は必ず明日の内に女の子と自然な形で出会う。そのフラグをワシが準備した。だから回収して何としても恋人になり、そして恋人としての契りを結ぶところまで行け」

『恋人としての契り』その一言が俺の気持ちを昂ぶらせた。

「つまり、卒業しろと」

「卒業？」

女の子は首を傾げた。

「つまり、童貞を卒業できるんだな」

女の子は童貞の意味が分かったのだろう。  
俺の頭から足を離すと腹にストッピングをきめた。  
俺はエビの様に丸くなった。

「……そうだ」

痛い中でも顔を赤くしている女の子が可愛いと思った。

「げほっとりあえず恋愛のことはなんとなくわかった。  
でも、もうひとつ聞いていいか？」

「手短にな」

「ところで、きみはどちら様？」

「……貴様が呼んだから来たのだろう。先程の神社のこともう忘れてしまったのか」

さっきの神社ってことは、フ●ミチキと諭吉さんの力で来たのか。  
大丈夫かな、この神様。

「不服そうだな。貴様」

先程の攻撃がまだ癒えていない俺に冷たい視線を容赦なく浴びせてきた。  
大丈夫これくらいじゃ反応はしない。

「いや、あそこの神社の神様なんて知らないから。てゆーか、神様がまだいたこと自体が  
驚きだから」

俺を言葉が気に食わなかったのか、また俺のおでこを踏みつけてきた。

「失礼な奴だ。ワシは確かに恋愛を成就させる力がある者だ」

「そうか。わかった」

とりあえず形だけでも納得したことにした。  
本当かどうかは明日になって確認すればいい。

そして嘘だったら通報すればいい。  
幸い明日は土曜で休みだ。  
いつでも拘束して警察に家宅侵入でつきだすことができる。

「よし。その信心深さは貴様を救うかもしれんな」

俺のおでこから足をどけた。

「ワシの力を信じてくれて嬉しいぞ」

「いや、俺の頭を踏んでるとき着物を下からのぞけたから。毛のないきれいなぼぼが……」

口は災いのもと、俺が最も学ぶ必要がある諺かもしれない。  
女の子からの激しい攻撃の嵐の中俺は意識を失った。

\*

目が覚めると体のあちこちが痛んだ。  
昨晚の攻撃の女の子からの攻撃の嵐とそのまま仰向けで床に寝ていたせいだろう。  
起き上がると時間はAM5:50、いつも起きる時間と同じだった。6時に鳴るはずの目覚まし時計を鳴る前に止め、ベッドの方を向いた。  
ベッドの上には昨日の女の子がタオルケットにくるまって寝ていた。  
俺は彼女の首筋にキスした後、朝食を作るため台所に向かった。

\*

ご飯にジャガイモの味噌汁、ハムエッグと微妙にアンバランスな朝食を4人分（いつもは両親と俺の3人分）  
作ると一人分をお盆に乗せて部屋に運んだ。  
部屋に入ると女の子は匂いに反応したのか、むくりと起き上がった。

「朝餉か、気がきいておるな」

俺からお盆を受け取ると机に座って食べ始めた。

「俺はちょっと行くことがあるから、誰にも見つからない様に部屋にいてくれ。いやこの部屋のどこかに隠れていてくれ」

「どこに行くのだ。ワシの力の効果で出会いを得るために行くのか？」

「いや、力の効果はまだ後で確認しよう。ちょっと朝ご飯を作りに行くだけさ」

「もう作ってあるだろう」

「いや、俺ん家じゃなくて、えーと、友達の家」

「なんで貴様が作りに行くのだ？」

「……まあ、いろいろあるんだよ」

それだけ言うと俺は家を出た。

裏手の林からスズメの鳴き声とさわやかな風が吹いてきた。俺は静の家に向かってまだ人気のまばらな住宅街を歩いた。

\*

静の家は共働きだ。

両親は企業家で最近成長中の食品輸出企業を2人で立ち上げた人すごい人だ。

父親が社長で、母も取締役を同じ会社でしている。

そして、この4月から重要な取引があるということで東南アジアやインドを歴訪するということで半年以上家を空けるということだ。

静は一人っ子、つまり一人暮らしをするということだ。

そして、静は家事スキルだけは0を下回りマイナスである。

かつて洗濯機にクレンザーをぶち込んだやつである。

冷蔵庫の中のモノとフライパンと調味料でスライムを作り上げた天才でもある。

俺が静の両親が帰ってくるまでの間、『年頃の息子が一人暮らしをしていると何があるか分からない。ひょっとしたら悪い男のだまされるかもしれない』と説得された俺の母親から静の世話係が命じられた。

そんなわけで（未だにどういうわけか納得できない）

俺は静の家に毎日通い、炊事、掃除、洗濯と家事全般をやっている。

炊事に至っては俺が一番うまくできるという理由で実家でも俺が担当している。

「邪魔するぞ」

合鍵を使い俺は静の家に入った。

当然人の気配はない。

俺は靴を脱いで家にあがるとまっすぐ二階にある静の部屋に向かった。

静の部屋に入ると今日もなかなか散らかっていた。

学校のプリント、ペットボトル、下着（女物、すでにこいつが女物の下着を着けていることに慣れた）が無造作に散らばっている。

ピンク色を基調とした部屋のど真ん中に静はベッドを置いている。

こんな場所に置いて不便ではないのだろうか。

静は目に優しいライトグリーン negligee を着て、タオルケットにくるまっていた。

「朝だ」

短くそう言うと強引にタオルケットをはぎ取った。

静は目覚め始めたのかベッドの上でもぞもぞ動き始めた。

いつもこんな具合だ。

結構目覚めの悪い静を10分くらいかけて起こす。

そして、寝ぼけている静にコーヒーを飲ませ完全に起こす。

negligee の裾が大きくめくれた。

太ももまで完全に見えて、ショーツも見えてしまっている。

ここで俺は気付いてしまった。

女の子向けの水色の清楚なショーツ、それに強烈な違和感があったのだ。

女の子向けのショーツが、静の股間に……

股間に違和感がない。

股間にフィットしている。

股間に男性ならあるはずのふくらみがない。

股間に違和感なくフィットして男でなく女に見える。

「どうなっているんだ？」

俺は静を仰向けにすると上からまたがり、片手をショーツの中に突っ込んだ。

……ない。

……………ない。

……………ない。

ナニがない。

「ふえ、きゃ」

股間をいじっていると静が起きた。

騒がれると面倒なので俺はもう片方の手で静の腕を押さえると上半身を倒し、体重をかけて静を拘束した。

「なあ、静一体何があったんだ？」

「何があったはこっちのセリフだよ。野田一輝君」

静の顔は俺の指に合わせ微妙に変化し、顔も真っ赤に染まりつつある。

「いや、だから股間が」

「寝ている僕の股間を見て、ムラムラ来てレイプか」

静は体を動かし抵抗を試みてはいるが流石に俺の体重を押し返すことはできない。

「静の股間どうなっているんだ、なんか変だぞ？」

「失礼極まりないな、きみは」

静の罵声を無視し、俺はショーツをがんばってずり下げた。

そこには生々しいピサの斜塔はなかった。

そこはなだらなか丘だった。

丘にはやわらかな芝生が茂っており、芝生は朝露に濡れてテラテラと艶やかな具合になっていた。

「テレビや小説でよく人が獣になる瞬間とか聞くだらう。まさか、自分が見ることになるとは思わなかった。

しかも幼馴染のを。今の君の顔、鏡で君に見せてあげたいよ。……いいさ、好きにしな。でも対価は必ず支払わせてやる」

俺は茫然としていた。

「どうした、レイブ魔」

「お、女？」

「はあ？ 何を言っているんだ」

ショーツの謎は氷解した、同時に今の状況を理解した。

「すまん、ゴメン」

俺は静から急いで離れ、そのまま関口家を飛び出した。

\*

家に着いたときはだいぶ汗まみれになっていた。

だがそんなこと気にもとめず俺は自分の部屋に駆け込むとベッドに座り勝手に人のマンガを読んでいた自称神様にヤクザキックをかました。

「ヘブン」

自称神様は謎のうめき声をあげて倒れた。

「そこになおれ、大江山の鬼め、拙僧が退治してくれる」

そして、俺は混乱していた。

「仏罰」

いつのまにか俺の後ろにいた自称神様が後頭部に空手チョップをいれた。

「アガペー」

俺も謎のうめき声をあげ、うつぶせで倒れた。

昨日と同じように俺の頭を踏みつけてきた。

「神をも恐れぬ不遜な行い。その報いは当然覚悟できているのだろうか」

ぐいぐいと昨日より強い力で踏まれた。  
うつぶせだからおでこやら鼻やらが痛い。

「何が神様だ、何なんだよあれ」

「あれとはなんだ？」

「俺の幼馴染が女になっているんだよ」

「ああ、それは昨日言っただろう。自然な形で女の子に会うと」

「自然じゃねえ。男から女になっていたよ」

「細かいこと気にするな。フラグを回収しろ」

「気にするよ。だいたいどうなるんだよ。男が女になるって、親とか学校生活とかどうするんだ？」

「大丈夫だ。皆あやつはもともと女だったと思うようになる。あやつが男だったと知っているのはワシと貴様だけだ」

「どうして俺は覚えているんだ？」

「神頼みしたからだ」

そういうものなのか。なんか納得できなかった。

「まあ、いいや。さっさとあいつを男に戻してくれ」

「それが神にものを頼む態度か」

「頭踏まれた状態でこれ以上どうしろと」



ある意味一番へりくだった体勢だぞ。

「ふん」

足をどけてくれた。

俺はあらためて、土下座した。

「お願いします。俺の幼馴染を元に戻してください」

「無理じゃ」

「おい、神様だろう。自分の起こしたことの後始末くらい何とかしてくれよ。よく考えたらだいたい何の神様だよ？」

「ワシは正確には神じゃない。その訓練生みたいなものだ」

今になってそんなこと言い出した。

「訓練生？」

「そうだ。縁結びの神様の訓練生、だから今は恋人がほしいという男の願いを不完全な形でしか叶えられんのだ。1000人の男に恋人を作らせたときワシは無事合格、晴れて一人前の神様の仲間入りということになる」

「ちなみにどうしたら縁結び成功と数えるの？」

「男女の契りだ」

「もっと穏やかなものじゃないのかよ」

「誰が見ても成功と分かる公平な基準だろう」

「確かにそうかもしれないけど……」

こいつに頼むと初体験したか見られるってことか、嫌だな。

「ちなみにあと一人の男の縁結びに成功すれば訓練終了晴れて神様の仲間入り。力も今みたいに限定的なものでなくなり、元の姿に戻れる」

「元の姿？」

「ああ、位が上の神様に修行のためこの姿に変えられた」

神様の世界って案外世知辛いかもしれない。  
こんな会話をしているうちにふとしたことが頭をよぎった。

「そう言えば、今朝静のネグリジェが不自然にめくれ上がったのは」

「ああ、ワシだ。貴様のことを後押ししたのだ。もう少し頑張ればお互い最善でないにしろ結ばれたものを、  
意気地なしめ」

その言葉にプツンときた。

「貴様の仕業だったのか」

俺はパッと立ち上がると怒りにまかせて神様をベッドに押し倒した。

「おわ、貴様なにをする？」

もたつくと何をされるか分からない。  
俺は勢いよく神様のまだ幼さの残る唇を奪った。

変化が起きたのはその瞬間だった。  
神様の体が光り出したのだ。

俺はたまらず目を閉じたがまぶたの裏側まで光が差してくるよう感じた。

「ひょっとしてこれが天罰ってやつか」

やがて光が弱くなって恐る恐る目を開けた。

俺は見知らぬ赤毛の男を押し倒していた。

「……は？」

「お？ ワシ元の姿にもどっとる」

赤毛の男はするりと俺の拘束を抜け立ち上がった。

「うん、どうやら訓練は無事終了したみたいだな」

男は一人納得して頷いている。

「よし、力も使えそう。さっきの言葉のとうり女になった貴様の友達を元に戻してやろう」

「え？ あ、ありがとうございます」

俺は一度深呼吸した。

「どういうこと？」

「ワシ恋愛の神様になる予定だったのに女の子の気持ちとか全然わからなかったの。だからもっと偉い神様から女の子の姿にかえられたの」

「そっか」

俺はこぶしに怒りと力をこめた。

「ひでえ詐欺だな」

渾身のこぶしはひらりとあっさりかわされた。

「はは、落ち着きなよ」

「黙ってろ」

「ちょっと神様、僕の体なんか男に戻っているよ。僕の恋を成就させてくれる契約はどう

なったの」

静が来た。

このくそややこしい状況は更なる乱入者で加え白熱していった。

「神様、もとの姿に戻っている。僕を出し抜いたな」

「違うよ、そこの一輝君に押し倒されて男女の契りを結ばされた」

「……女になった僕を押し倒した後に幼女をやったのか。このレイプ魔、ロリコン、鬼畜野郎」

「一応言っておくが男女の契りってキスのことだぞ」

「それは些細な問題だ」

結構大事な気がするよ。

「一輝、今から君の唇を差し押さえする」

「何がどうなってそういう結論が出た」

「その男になった神様に願掛けした。2カ月前から両親が都合よくいなくなったりとか一輝を誘う準備を整えてもらった。そして、一輝があ神社を発見することも含めてな。女になったことは素直に驚いたが」

静は俺の襟を掴み、締め上げた。

「だけど、結果は失敗だ。気がついたら男に戻っているし。神様はいつのまにか目的を達成している」

静の言葉遣いからいつもの女らしさがすっかり抜けていた。それだけ興奮しているのだろう。

「やっとわかったよ」

「なにが？」

もうどうにでもなればいい。そんな投げやりな気持ちになっていた。

「恋愛と戦争では手段をえらばない」

まさか……

静は目を閉じると唇を俺を近づけてきた。

「ごゆっくり。うん、いい仕事した」

赤毛の神様は部屋から出て行った。

「やあ」

俺は静を突き飛ばし、窓を開けるとためらうことなく飛び降りた。  
これが火事場の馬鹿力というやつだろう。

「こんな青春認めるか」

あの神様は昨日いった。  
今日女の子とのフラグが立つと、それをなんとしても回収しないとイケない。  
でないと、静と××××になる。  
そんな確信に近い予感がある。

「きっとまだ何とかなる」

俺は女の子とのフラグを探すためできることは全てしよう。  
でも、その前にあのクソ神様の神社を燃やしてから行こう。  
ファーストキスが男、したときは女の子だったかもしれないがそんなの慰めにならない。  
その嫌な過去の修正から俺は青春を始めることにした。

FIN